

人生の贈りもの

大衆演芸への興味 研究テーマに

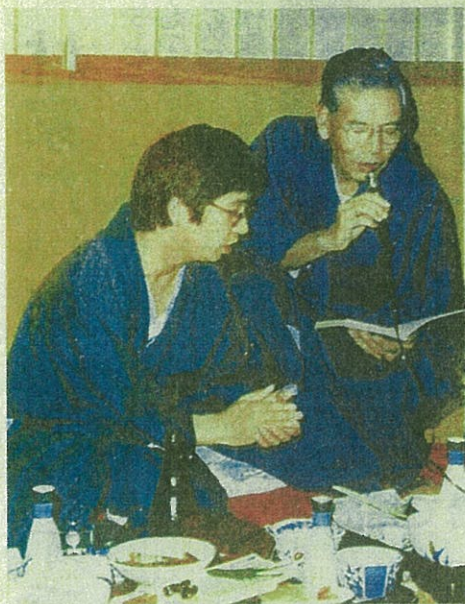
京大人文科学研究所所長 山室信一(63)

6

—東大助手になってすぐ政治学者の故・丸山真勇さんを中心とする研究会に参加しました。

—まだ20代後半で、参加というより研究会を開催するときはがきに宛名書きをするような事務連絡の役をしていたんです。

—「比較思想の会」(VGの会) といつて、そのころすでに東大を退職されていた丸山さんを囲んだ研究会で、メンバーはいわゆる丸山学派とも呼ばれた研究者の方々でした。私からみたら大先生でも、丸山さんの前では学生時代に戻ったかのようにお互いに競い合っていました。



東大助手時代(左)。「研究中の写真はないですね。懇親会の写真はあるんですが」。右は指導を受けた政治学の石田雄(たけし)名誉教授=本人提供

私には完璧に思える発表でも、丸山さんは細かな見落としを指摘されていました。真剣勝負の場でしたね。

—ご自身の発表は。

2回あります。1度目は法政思想について報告しましたが、2度目は大衆演芸の話をしました。落語や講談が大衆の政治思想にどんな影響を与えたかという内容です。明治期の資料を調べると、三遊亭円朝や松林伯円などの落語家、講釈師たちが、

噺の中に欧米の法律や社会情勢の話題を取り入れたり、今起きているニュースにコメントをつけてわかりやすく説明したり、いまで言うテレビのコメンテーターのような役割を果たしていたことがわかりました。芸人たちの影響力は大きかったん

です。

—欧米の思想が芸人を媒介して日本に広まったんですね。発表するときは極度に緊張しました。「ルソーの政治思想

は」といった議論が飛び交う研究会で「円朝が」「伯円が」と話すわけですから。いくら昔から芸人に強い思い入れがあるといつても、場違いな気がして。

—芸人が好きなのですか。

幼いころはラジオ時代でしたからね。「柳亭痴楽はいい男 鶴田浩二や錦之助 あれよりぐーんといい男」といった落語の枕を覚えたり、素人がのどを競う「浪曲天狗道場」を聴いて、同級生と競い合うように声色をまねしたり。小学生のころの将来の夢は芸人でした。大学時代も寄席に通っていたので、研究

者になってからも研究テーマにしていました。

—丸山さんの反応は。

直接は聞いていないのですが、政治思想を大衆演芸の観点から調べるのを面白がられていたと、後になってその場にいた先生に教えてもらいました。まだ若い研究者の問題意識を自由に伸ばしたいという激励の意味があったのだと思います。丸山さんは私が衆議院法制局にいたことをご存じだったので「そのことをいやすように。ほかの人ができないことなんだから」と言われました。

実は会うまで、丸山さんを批判する論者の影響を受けていて、心情的に敬遠していました。でも実際は座談の名手であり、その博識と構想力には圧倒されました。若いころに丸山さんに会ったことは、ある意味不幸ですね。この人を超えるのは無理だと確信してしまいましたから。

(聞き手・河野通高)